看護部

1．2018 年度看護部総括　　看護部長　　久保　ひろみ

地域包括ケアが推進されている中、看護職員を取り巻く背景は、高齢化の進展、疾病構造や在宅療養の変化などから、多様な医療ニーズに対応しなくてはならない状況です。千葉二次医療圏でも 65 歳以上の高齢者のうち、認知症高齢者が増加していくほか、当院周辺地域では高齢者独居世帯や夫婦のみの世帯がさらに増加しています。看護職員はこれまで以上に、地域の多様な場で患者や家族の意思を尊重しながら、看護を提供しなくてはなりません。急性期病院でも地域での療養を見据えて支援ができる病院看護師の育成がさらに求められています。

平成 30 年度、看護部は 17 名の新採用看護師をむかえ、常勤看護師・助産師 302 名でスタートしました。限られた人員の中でも、専門性を発揮しながら効率的な運用を考えリリーフ体制の構築を開始しました。現在では可視化した指標をもとに、師長自らマネジメントし、人員の配置ができるまでとなりました。

また、この数年、地域包括ケアを推進される現状の中、在宅療養支援のために様々な取り組みを行ってきました。今年度は、高齢者だけでなく医療需要度の高い小児に関しても退院前訪問・退院後訪問を開始し、在宅で安心した療養生活のための支援に成果を上げました。

今後、さらに高齢者の入院割合が大きくなっていくなか、「高齢者にも強い組織」にするために、高齢者ケアの充実を図り、認知症ケア療法士や認定看護師の育成を推進することができました。

今後は実践の場において、高齢者・認知症の患者と家族が安心して療養していけるようにするため、看護師の活動の推進を支援していきます。地域との連携を深め、継続した看護を提供できる地域包括ケア時代をささえるジェネラリストの育成を目指すとともに、組織の役割・課題を認識し改革、挑戦していける自律した専門職育成を目指していきたいと考えています。日々看護の質向上に努め「看護でも選ばれる病院」になれるよう、今後も努力していく所存です。

2．教育実績　　副看護部長　　千代田　操子

チャレンジレベルⅣ以上を対象に看護管理者に必要な能力を段階的に示し、病院管理者の計画的かつ段階的な育成を目指すため「マネジメントラダー」の検討を行いました。2017 年度より開始した「千葉市病院看護部教育・キャリアラダー」の名称を「千葉市立病院看護職員キャリア開発ラダー」に変更して新人から看護管理者まで実践の中で成長を確認しながら自分自身の能力向上に活用できる内容となっています。2019 年度 4 月より開始し全看護職員の能力開発につながることを期待しています。

院内研修では、院内認定コース（2 年間）が終了して各部署で相談役となれる「フィジカルアセスメント」「がん看護」の認定者が 2019 年度 4 月に誕生します。また、研修受講の希望は申し込み制としてチャレンジラダーレベルに合わせた両病院で開催する研修も受講できる様に体制を整えました。

次年度も自らキャリア開発を考えて研修に参加して「専門領域」「エキスパート」「看護管理者」を目指す、自律した看護師を育成し支援することが課題です。

３．業務実績　　副看護部長　　松川　菜穂美

急性期医療を提供する当院の役割・機能に見合った看護職員確保に必要な「入院料 1」を固持するため、「重症度、医療・看護必要度」を適正に評価できるよう、他の職種を含めた説明会の開催や、整合性の確認による精度の向上に努めました。

外来において看護職がより効率的に専門性を発揮できるよう、患者からの予約変更などの電話の対応を、医事事務職と業務調整を行いました。

今後も救急科の立ち上げ、他院からの紹介患者応需の増加による看護の専門性、外来検査部門の看護の充実に向け、業務整理を推進していきます。

４．労務実績　　副看護部長　宮間　厚子・川村　美穂子

看護職が健康で働きやすい職場を目指すため、労働時間管理適正化に向け時間外勤務時間数・週休・年休・夜勤回数を把握し、公平な休暇の取得と業務調整を推進してきました。そして、看護部超過勤務時間総数は平成 29 年度と比較しても減少傾向が続いています。また、仕事量や仕事量の変動が大きく心身の健康に影響を及ぼしやすいため、体調不良や病気休暇、休職中の職員と面談し心身共に健康な状態で看護に当たるための健康づくりを支援してきました。しかし、時間外勤務時間数など個人によりその差が大きいため、来年度もヘルシーワークプレイスを目指してライフステージを考えながら支援し、安心して働き続けられる職場を目指します。

看護部の理念

私たちは病院理念に基づき、市民の皆様に信頼される質の高い看護を提供します。

基本方針

１．人権を尊重し、安全・安心な看護を実践します。
２．地域との連携を深め、継続的な看護を提供します。
３．知識・技術・感性を磨き、自律した専門職を育成します。

2018 年目標

１．患者中心の看護を提供する。
２．専門職として、自律した自己啓発・研鑽に努める。
３．お互いに認め合うことのできる、やりがいのある職場をつくる 。
４．医療チームの一員として、病院運営に参画する

病床稼動状況　2018 年度　看護部患者統計

	ICU	3F	4F	5F	6F	7F	GCU	NICU	合　計	7F 新生児
病床数	14	42	44	50	53	44	25	21	293	10
在院患者数	1100	8385	7934	11392	11374	7876	4305	5877	58243	2606
在院患者 延数	1146	10653	9432	12712	12838	8711	4554	5898	65944	3087
1 日平均患者数	3.1	29.2	25.8	34.8	35.2	23.9	12.5	16.2	181	8.5
入院患者数	290	2243	1418	1226	1448	827	2	272	7726	476
退院患者数	476	2268	1498	1320	1464	835	249	21	7701	483
病床稼働率（%）	22.4	69.5	58.7	69.7	66.4	54.2	49.9	76.9	61.7	84.6
病床利用率（%）	21.5	54.7	49.4	62.4	58.8	49.0	47.2	76.7	54.5	71.3
平均在院日数	6.5	3.7	5.4	8.9	7.8	9.5	34.3	40.1	7.6	5.4
平均看護職員数	22.	40	25	26	27	34	18	45	237	
（夜勤看護職員数）	20	34	23	24	23	30	13	44	211	
平均夜勤回数	9.2	8.0	8.2	7.9	8.3	8.2	10.3	9.4	8.6	

看護職員状況

１．看護配置状況 2018 年 4 月時点　病床数：　293　床　看護単位：9 単位

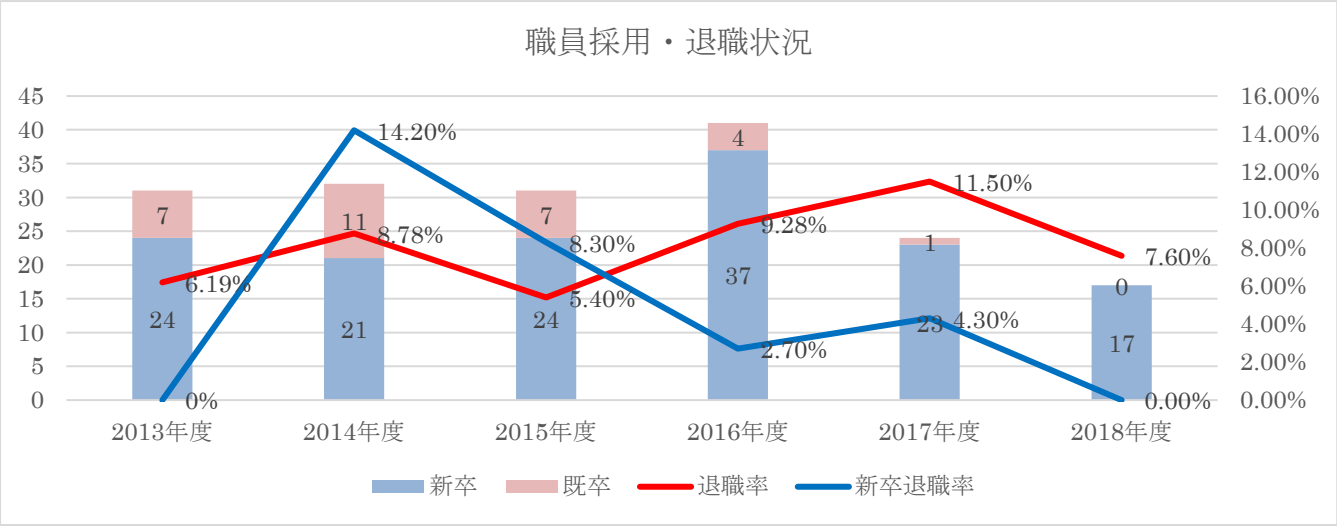
看護要員：看護師　273 名　助産師　29 名　介護福祉士　3 名　看護補助員　5 名

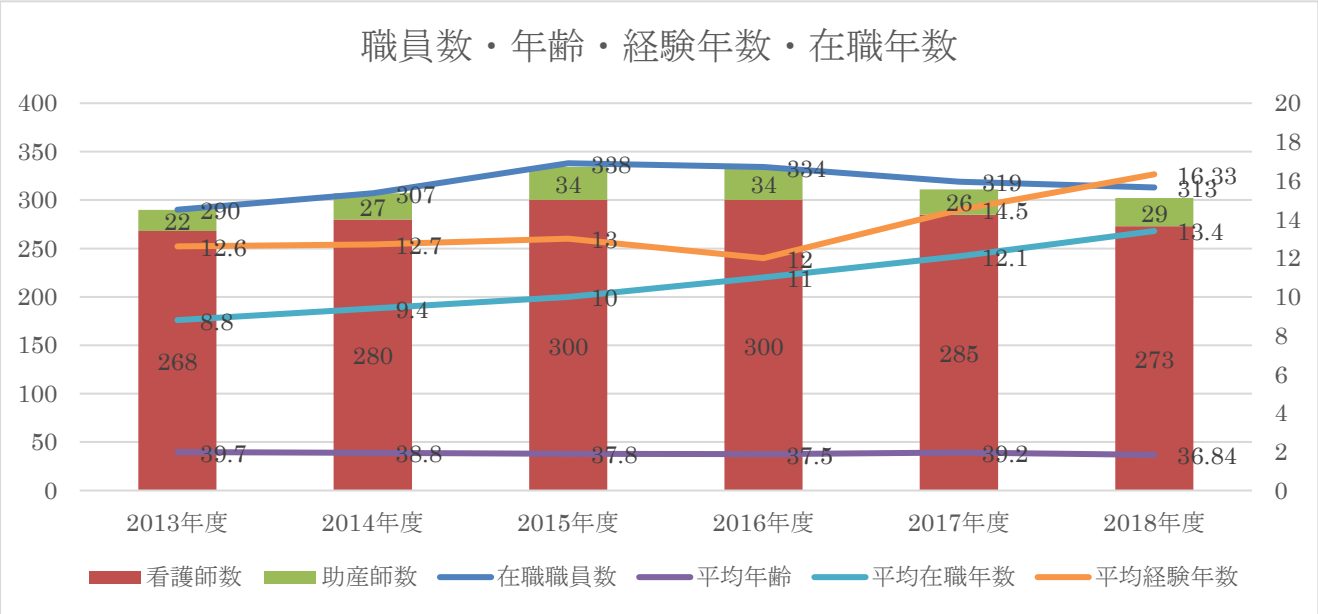
病床数変更：

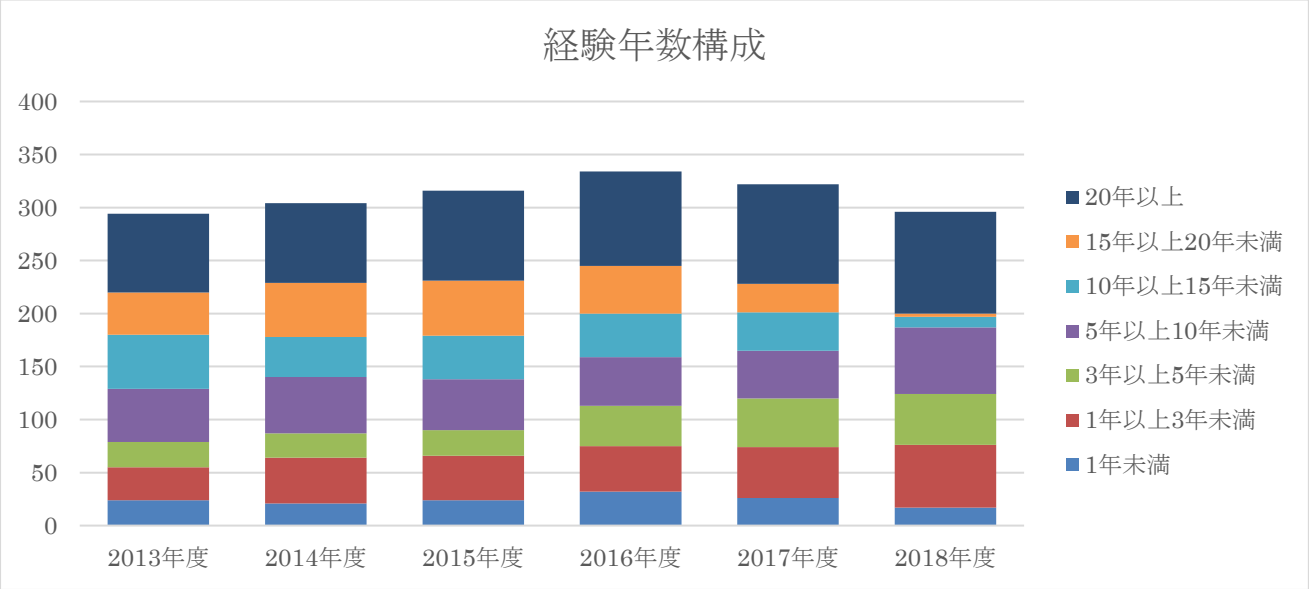
看護単位	病床数	看護配置体制	備考
７ユニット	44 床 (MFICU：3 床)	7 対 1 （MFICU：3 対１）	
６ユニット	53 床	7 対 1	
５ユニット	50 床	7 対 1	
４ユニット	44 床	7 対 1 小児管理料 4（12 床）12 月～	
3 ユニット	42 床	小児入院管理料１ 常時 7 対 1 夜間 9 対 1	
NICU	21 床	総合周産期特定集中治療室管理料 常時 3 対 1	
GCU	25 床	新生児治療回復室管理料 常時 6 対 1	
ICU・CCU	14 床	ハイケアユニット入院医療管理料 常時 4 対 1	
手術室	5 部屋		

２．職員動向：

① 職員数・平均年齢・平均在職年数・平均経験年数



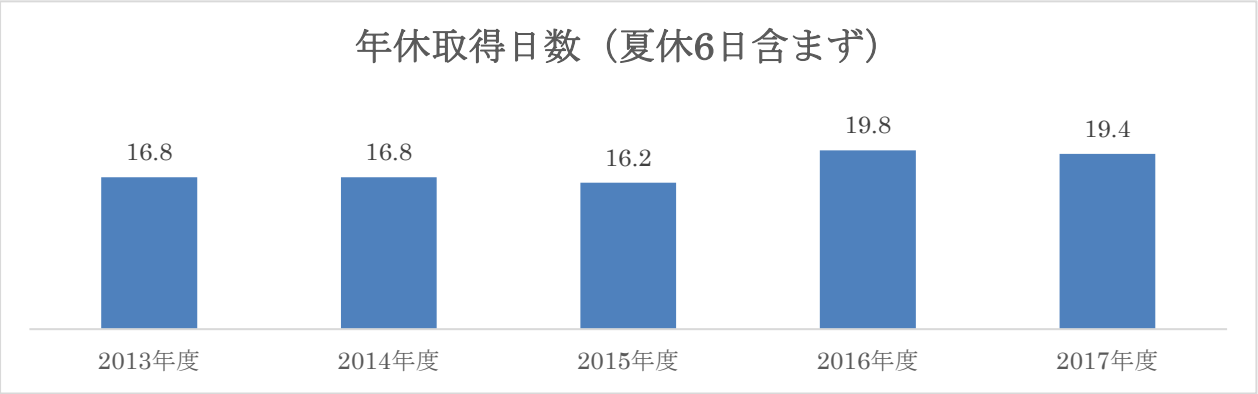




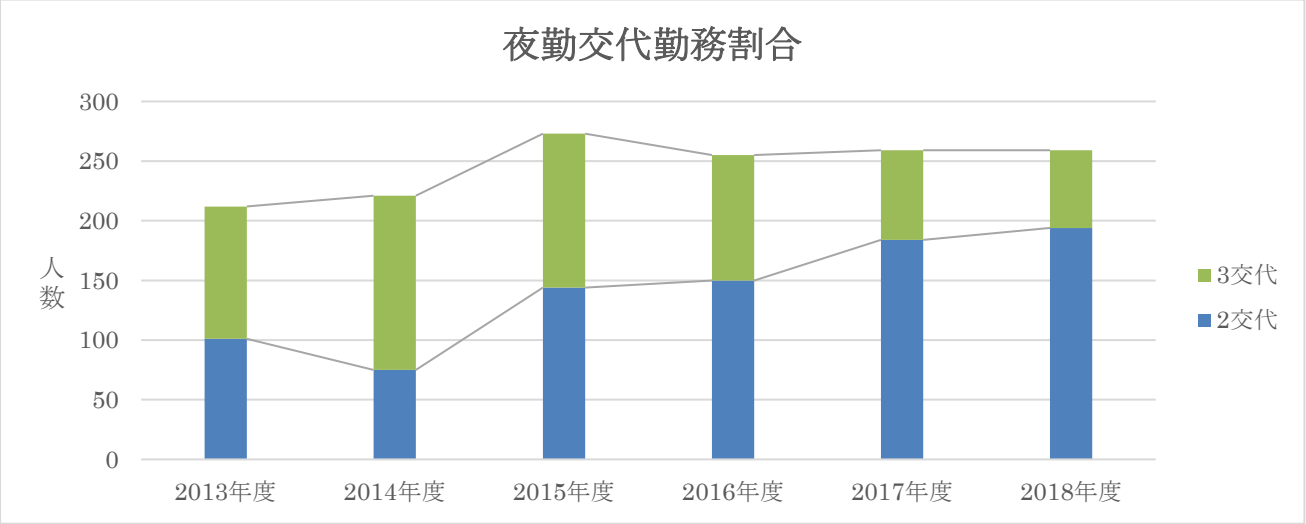
② 2018 年度　産休・育休取得状況

	産休	育休	部分休	育児短時間	介護	病休	休職	計
人数	18	21	17	18	0	18	1	93

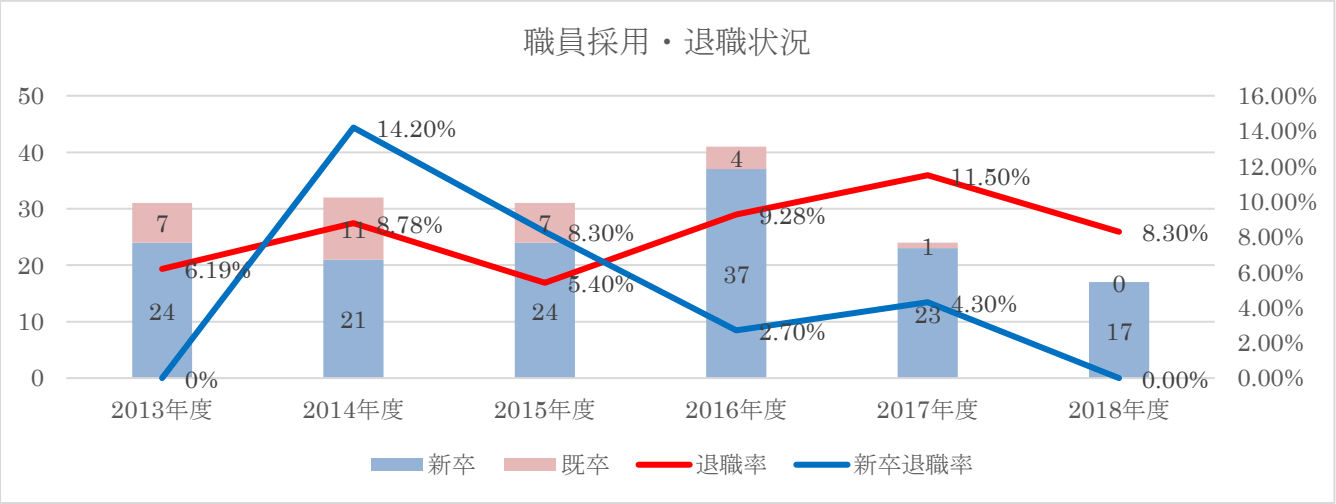
③ 年休取得状況　（2018 年 3 月 31 日現在）

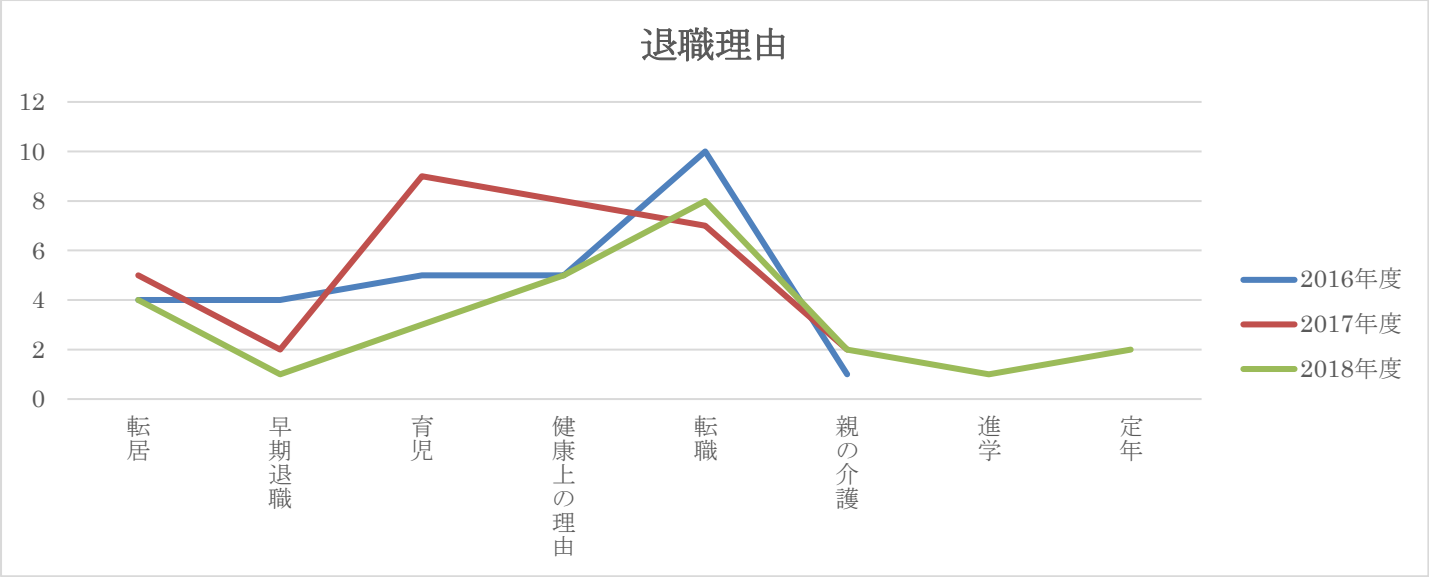


3．夜勤選択割合（2 交代と 3 交代）



4．採用と退職者数：2018 年度退職者　26 人【内訳】育児 3　健康上理由 5　転職 8　転居 4
介護 2　進学 1　早期退職 1　定年 2





2018 年度研修受講状況

	全体	フルタイム勤務	部分休勤務	短時間勤務
研修対象者数（人）	270	232	22	16
院外研修・学会受講数（件）	319	291	19	9
平均受講回数（回）	1.18	1.27	0.86	0.56
受講率（延）	118%	127%	86%	56%
研修未受講数（人）	53	43	3	7
未受講者率	20%	19%	14%	44%
e -ラーニング受講率	95%			

看護部　2018 年度委員会活動

各委員会	活動内容
教育委員会	チャレンジレベル別院内研修の研修項目を両病院で揃え、希望する研修を海浜病院と青葉病院のどちらの病院でも受講できる体制とした。 チャレンジレベルⅢ以上の看護管理研修を合同で実施した。受講者からは交流を通して視野が広がり気づきにつながるという意見が多かった。また、　昨年度に新しく２年の期間で開講した「緩和コース」「フィジカルアセスメントコース」研修が修了して受講者 9 名が院内認定された。後輩指導や看護のロールモデルとして各部署内での活躍が期待されている。 今後も社会の動きに合わせて活躍できる自律した看護師の育成を目指していく。
臨地実習指導者会	学生指導の質を担保するために臨地実習指導者要綱・臨地実習指導者マニュアルを作成した。また、全体オリエンテーションの内容と方法を見直し、病院・外来部門の説明用パワーポイントを作成した。さらに、学生専用のケア用品を各部署に配置し、学生が学ぶ環境の統一を目指した。 今後も指導者が課題を見つけながら指導者像を描き、役割モデルになることを目指していく。

業務・改善用具検討委員会	入院オリエンテーション時に使用している資料の見直しを行った。患者が入院生活に困らないよう、オリエンテーション資料の内容を選択し、文字を大きくした。 また、与薬カートの使用方法が、各科で異なっていた。そのため、毎日の重要な与薬管理業務をサポートしていく必要があった。そこで、1 患者、1 引き出しで、1 週間分の内服薬が管理できるよう、各部署における与薬トレーの統一を行った。 さらに、ベッド管理の方法が統一されていなかった。そのため、各科で保有しているベッド数・種類・購入年について明確にした。点検方法についても、統一していく必要がある。 今後は、現在の医療に対応した質の高い看護を提供するため、業務の改善を行うとともに、看護用具・医療機器管理および整備を図っていく。
記録委員会	教育キャリアラダーに沿って新人対象の「看護診断・記録基準」「看護必要度」研修（ラダーⅠ）、看護記録の基礎①（ラダーⅡ）、看護記録の基礎②（ラダーⅢ）と段階的に研修を実施した。また、「重症度、医療・看護必要度」研修は各病棟スタッフが講師となり複数回実施した。さらに、全部署対象に看護記録の監査を 1 回/年実施し、結果をフィードバックして基準に沿った記録を目指した。 今後は地域と連携できるような記録や看護サマリーの充実を図り、継続看護につながる支援をしていく。
看護研究委員会	会員同士の親睦が図れるように新人歓迎会を開催することができた。参加者は、看護師 89 名、医師 3 名、コ・メディカル 14 名、事務職員 1 名の合計 107 名であった。看護研究発表会では、4F・6F・7F から演題発表があった。 次年度は、研究活動が円滑に進むようパソコン・図書の購入を行っていく予定である。 今後も、看護師・助産師同士の親睦・研究・教育を通し自己研鑽を図れるよう、会員の支援を行っていく。

看護部実績　専門領域の強化

日本看護協会認定の専門看護師【母性】1 名、認定看護師【新生児集中ケア、小児救急看護、緩和ケア、糖尿病看護、皮膚・排泄ケア、集中ケア、感染管理、乳がん看護、がん化学療法看護、摂食・嚥下障害看護】14 名が中心となって院内・院外の講師として活躍している。

また、今年度は学会認定の認知症ケア専門士取得者が 4 名増えて 6 名となり、「院内デイケア」の計画など増加する高齢者への活動を積極的に行っている。さらに次年度は、認知症看護と摂食・嚥下障害認定看護師が誕生する予定であり、高齢者ケアの充実が図れることを期待する。

看護部　リソースナース委員会　活動状況

分野	集中ケア：町田　裕子
実践	人工呼吸管理患者を中心に、バンドルやプロトコル、スケールなどの客観的指標を用いて、標準的な看護の実践を目指して関わった。
指導	2017 年度から院内看護師のフィジカルアセスメント能力の向上を目指し、ラダーチャレンジレベルⅢ以上を対象に研修を開始した。2019 年 4 月、10 名の認定者が誕生する。2019 年度からは、認定者が院内で活躍してくれることを期待するとともに、活躍できる場づくりやフォロー体制を構築していきたい。
相談	研修などの機会を通して、集中ケア認定看護師が対応できる相談内容などの広報活動を継続していく。今後は、認定者を通し、病態変化のアセスメントなどを相談し合える環境作りをしていきたい。

分野	皮膚・排泄ケア：鈴木　修子
実践	新人研修では臨床の実践力につながる「排泄と褥瘡管理の基礎」の講義と演習を行い、院内全体研修では「スキンテア・MDRPU」について知識の普及を図った。院内褥瘡管理では、褥瘡対策チームによる多職種の褥瘡回診の試行を開始し 152 件の回診を実施した。外来でのストーマケア支援は 183 件、院内コンサルテーションでは難治性の術後離開創の管理に力を注いだ。今後も一人でも多くの患者さんの笑顔がみられるよう、ケアの専門性を高めていきたい。
指導	褥瘡回診を通し、褥瘡の見かたや管理の考え方について普及と指導を行った。また管理困難なストーマを有する患者さんのケアについて、病棟看護師や訪問看護師と情報の共有を図り、ケアの具体的な指導を行った。2019 年度は病棟で褥瘡ケアの中心になれる看護師の育成支援を行っていきたい。
相談	院内コンサルテーション 45 件、その後の病棟訪問は延べ 69 回であった。地域活動として市・県のオストミー協会での講演と相談対応を行った。また千葉市内の看護師を対象に年 2 回、スキンケアフォーラムを開催し、ケア困難事例の相談に応じている。

分野	緩和ケア：髙島　美智子
実践	患者・家族の全人的苦痛と QOL を重視して関わる事を目的として、看護外来での相談を行っている。終末期患者の意思決定に寄り添いながらアドバンス・ケア・プランニングを取り入れ、その人らしい生活を送れるように関わることができた。慢性期疾患患者の終末期ケアへの介入にも積極的に取り組んでいる。
指導	2017 年度より、チャレンジレベルⅢ以上を対象に院内における緩和ケアの中心となる看護師を育成するため、乳がん看護認定看護師と伴に「がん看護（緩和）」コース研修を行っている。研修修了後は各自が病棟のリンクナースとして活動できるように、継続した指導を行っていく。
相談	病棟カンファレンスを活用し、スタッフの相談を実践対応で解決できるように取り組んでいる。今後は専門知識を活かし、地域のサポートチームからの相談にも対応していきたい。

分野	小児救急看護：松尾　祐吾
実践	部署内の救急係と連携し、救急シナリオシミュレーションを継続して実施しており、医師と協働で行うことができた。今年度、明らかになった課題を次年度に活かし、より実践に即したシミュレーションとしたい。また、院内トリアージは開始より 3 年を経過し、トリアージ教育やカンファレンスの在り方を再考する時期でもある。一層の質向上のために実践モデルとなり次のトリアージナース育成を図りたい。今後も子どもの権利を守るための家族への介入やホームケア指導の充実など、院内だけではなく地域のニーズに応えられるような小児看護を構築していきたい。
指導	院内ではチャレンジレベルⅠ・Ⅱを対象に「BLS」「急変時対応」「フィジカルアセスメント」研修を行った。また、チャレンジレベルⅢ以上を対象に部署内の指導者を育成するための「フィジカルアセスメント指導者」研修を実施し、10 名の修了者を出すことができた。院外では、子どもが家庭で病気や怪我をしたときに悪化しないための対処方法について「ホームケア」公開講座を実施し、市民の啓発活動に努めている。
相談	主に小児ユニット内での小児救急やトリアージ、ICU・外来ユニットより救急科開設準備にかかるトリアージ関連の相談を受け、支援を行った。

分野	母性看護専門看護師：阿部　祥子
実践	FAST チェックリストの外来使用を開始し病棟内での情報共有につなげることができた。それにより早期にハイリスクの患者を把握し対策を考える機会となった。
指導	病棟において産科をとりまく法律、国の流れ、千葉市における産後ケアについての勉強会を企画し実施した。今後も知識の啓蒙を行い質担保のための看護力向上を目指していく。
相談	病棟スタッフからの患者ケア（主に妊産婦・母乳・退院支援など）に対する相談に対応した。今後は他部署からの授乳や妊産婦に関する相談にも対応するための広報活動を行い母性看護の充実につなげたい。

分野	乳がん看護：中村　志穂
実践	初発・再発の乳がん患者に対して、身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな状態を総合的に判断し個別にケアを計画、実践した。看護外来では延べ 56 件の面談を実施し、告知後の心理面のサポートや、意思決定に関する支援、リンパ浮腫ケアを行った。
指導	乳がん検診の勉強会を行い、検診時の看護実践が向上できるよう指導を行った。また、乳房切除後のボディイメージの変容に対する看護、補整下着の説明などは病棟スタッフと一緒にアセスメントした後、実践を通して役割モデルを示しながら指導を行った。
相談	病棟スタッフからの相談（告知後の不安や乳房切除後の補整下着の説明など）に関してコンサルテーションを行った。ピアサポーターが主催している乳がん患者会（4 回／年開催）に参加し、生活する上での様々な相談にもピアサポーターとともに対応した。

分野	新生児集中ケア：伊東　真弓
実践	新生児看護の専門的知識を活用し、個々の新生児とその家族に合わせた育児技術の獲得支援を行っている。また、部署のスタッフを対象に、個別に合わせた育児支援看護を提供できるよう OJT を実践した。今後も育児技術獲得に関して集団指導から個別支援につながる OJT を実践していきたい。
指導	部署内の新生児フィジカルアセスメント力の向上を目指して勉強会を実施した。また、2017 年度より、新生児蘇生法講習会を年間計画で開催する体制を構築した。これにより院内スタッフのスキルアップと共に院外から継続的に参加できる体制となった。今後は院内全体に広報して、新生児蘇生法の普及を目指していく。
相談	入院中の新生児の症状に関する相談に対応した。今後は新生児蘇生法の普及を通して、新生児ケアに関する相談を他部署からも受けられるような広報活動をしていきたい。

分野	糖尿病看護：水谷　幸子
実践	当院の糖尿病外来に通院中の患者や家族を対象に、糖尿病という病気を正しく理解し、食事療法や運動療法など、患者個々が自己管理できるようになる事を目的とした糖尿病教室の企画・運営を実践した。また、糖尿病は予防できる疾患でもあるため、市民に対しても正しい知識と、理解を深めて貰うために市民を対象とした公開講座を開催した。 今後は、糖尿病合併症予防を目的としたフットケア外来の開設や糖尿病透析予防などにも着手していきたいと考えている。
指導	自部署の看護スタッフを対象とした糖尿病の薬物療法についての勉強会を開催した。また、新入職者を対象としたインスリン療法と血糖自己測定についての勉強会を開催した。定期的に勉強会を開催する事で糖尿病に対する知識を深めてもらい、患者に対し安全な看護が提供でき糖尿病看護の質の向上を目指していきたい。
相談	主に自部署の看護スタッフからの薬物療法、低血糖時の対応、管理栄養士より血糖自己測定を行っている患者の穿刺痛について相談対応を行った。院内どの部署にも自己の存在を認知してもらえるよう広報し、他部署からの相談件数を増やしていきたい。

分野	感染管理：髙本京子・大内咲絵・佐々木みゆき
実践	病院内で発生する感染症の監視と疫学的調査、多剤耐性菌の保菌状況を把握し管理を行った。入院患者・職員のインフルエンザが多く、全職員に対して注意喚起とマニュアルの整備、予定入院患者の健康チェックを行い感染拡大は無かった。また、地域の麻疹・風疹の流行に対して、院内の対応を整備し感染防止に努めた。手指消毒剤の使用量調査と手指消毒剤使用状況調査を実施した。
指導	ICT では、標準予防策の遵守状況や環境整備（5S）状況を確認し改善点を指導した。AST が発足し、抗菌薬を適正に使用するために抗菌薬使用前の血液培養検査実施率調査を行い、マニュアルを変更した。院内では、委託職員を含む全職員への研修を複数回開催し全体の受講率は 86%だった。
相談	認定看護師 3 名で看護部門の各部署を分担して担当している。相互に連携をとりながら電話やメールでの相談に応じた。主な相談は、患者・職員のインフルエンザ発症時の対応であり、相談件数は 90 件だった。

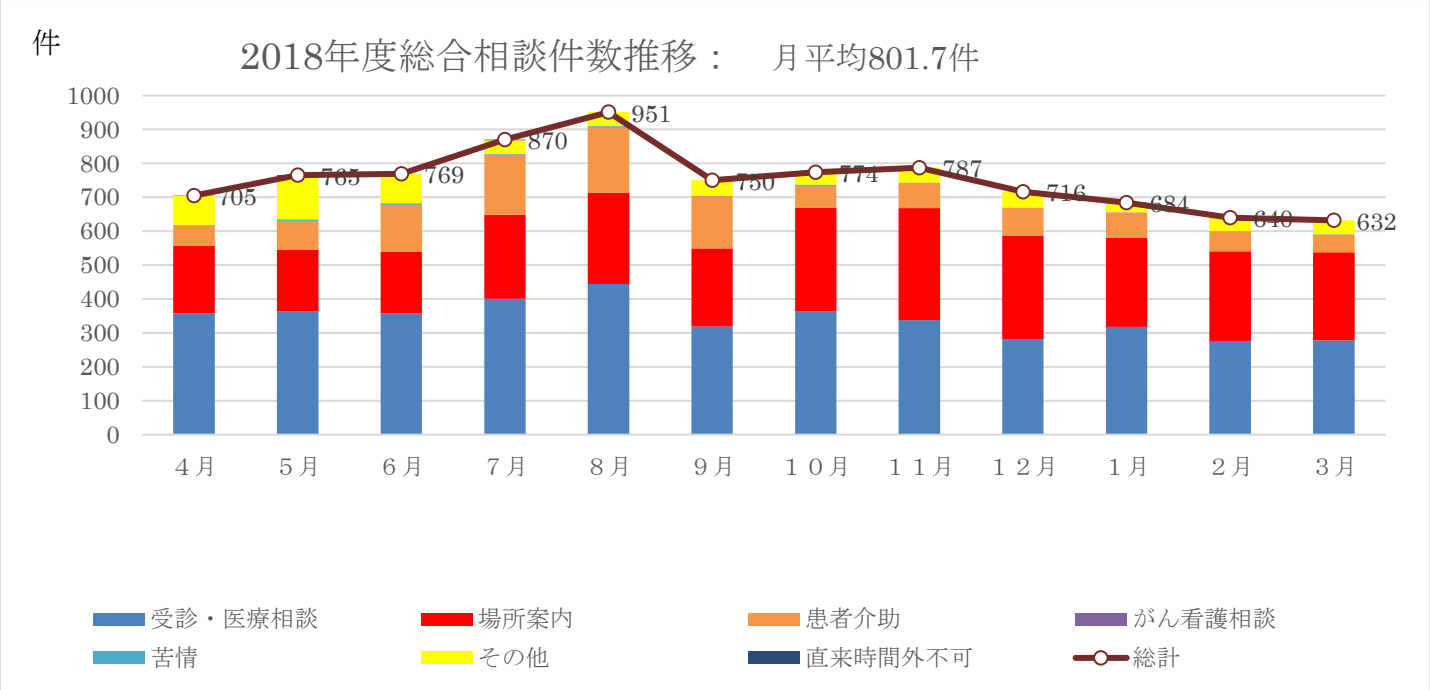
看護研究会　2018 年度　研究内容

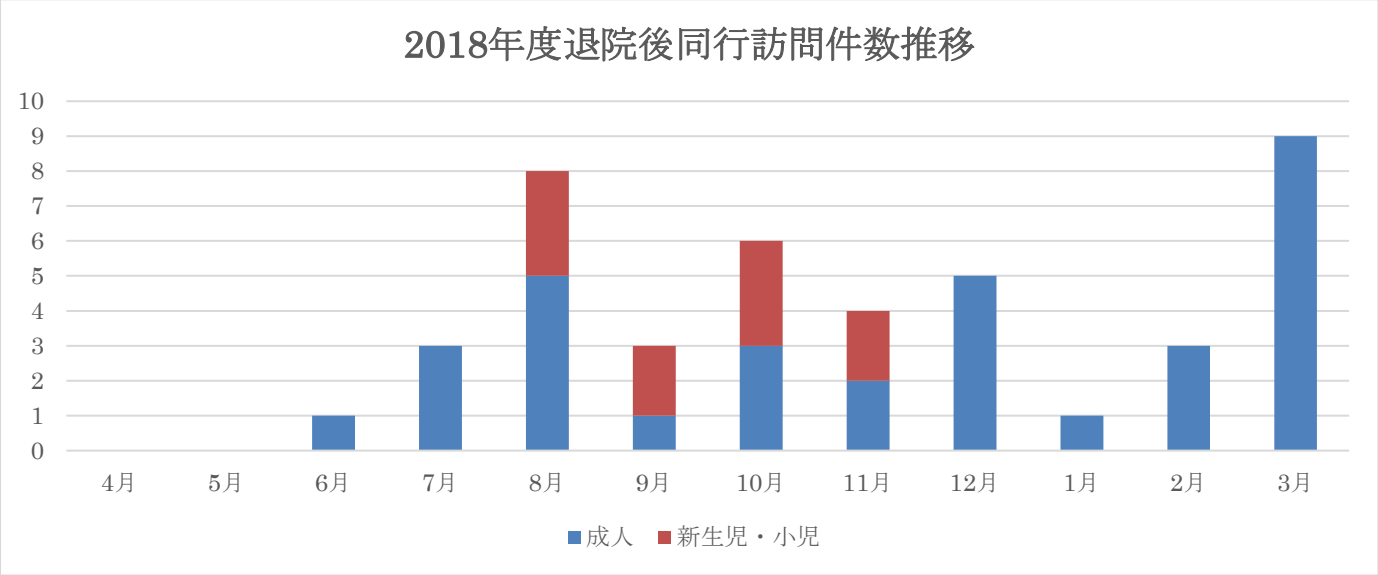
研究題名	所属	研究者
心不全手帳を導入した患者指導の試みとその効果～心不全患者に対する指導の統一にむけて～	4F	稲毛奈緒子　藤原成美　小川真由美
一般病棟で勤務する看護師のバーンアウトの現状について	6F	鈴木彩乃　牛丸茜
入院中の妊婦の安静に関するストレスとその対処法	7F	石原みさき　吉田渚　加藤　佳子

学会発表　一覧

年月	所属	氏名	研究名	学会
2019 年 2 月	7 階病棟	宮　真由美 他協会職能	千葉県内におけるアドバンス助産師の現状と課題	第 37 回千葉県看護研究学会
2018 年 12 月	3 階病棟	竹田貴子	小児病棟で働く看護師の自信につながった子どもと家族への看護実践：卒後３年目の実践を振り返って	第 38 回 日本看護科学学会学術集会
2018 年 10 月	3 階病棟	森下亜希子 梅崎しおり	看護師と保育士が協働して行うプレパレーション	第 57 回全国自治体病院学会
2018 年 10 月	5 階病棟	仙崎美奈 中村志保	終末期患者の退院支援における現状と課題	第 57 回全国自治体病院学会

相談支援センター：　2018 年度総合相談件数推移・退院後訪問件数推移





総合相談窓口では年間相談件数が昨年に比べ倍増し、その中でも医療・受診相談が 60%を超え、地域からの電話相談は３０％以上を占め相談内容も多岐にわたっています。また、がん相談窓口としてがん看護外来予約に 12 件結びつきました。地域における役割拡大のために退院後訪問や同行訪問は 43 件実施し、その内訳は成人 33 件・新生児は 10 件でした。

来年度は患者中心の継続看護質向上のため、入退院支援と退院後同行訪問の強化（多職種連携による退院困難リスクへの対応）や多岐にわたる相談内容に対応できるスキルの向上が課題です。

相談支援センター：　2018 年院内ミニ講座　実績

	開催日	講座名	講師名	参加者数
1	6 月 27 日(木)	正しくしろう乳がん検診	中村　志穂 （乳がん看護認定看護師）	16 名
2	7 月 27 日(金)	子どものホームケア講座	松尾　祐吾 （小児救急看護認定看護師	33 名
3	9 月 19 日(水)	自宅でできる転倒予防	八木　輝彦 （理学療法士）	27 名
4	10 月 24 日(水)	今日からできるインフルエンザ対策	大内　咲絵 （感染管理認定看護師）	24 名
5	11 月 28 日(水)	正しくしろう糖尿病	水谷　幸子 （糖尿病看護認定看護師）	40 名
6	12 月 12 日(水)	食事から生活習慣病を予防する	高倉　由美子 （管理栄養士）	14 名
7	1 月 23 日(水)	正しくしろう薬の管理	島田　英朗 （薬剤師）	18 名
8	2 月 21 日(水)	正しい目薬の使い方	黒川　潤子 （視能訓練士）	14 名

看護部主催　教育講習会開催：【新生児蘇生法】2018 年度　講習会開催

	開催回数	参加者数
新生児蘇生法専門 A コース	2	4
新生児蘇生法専門 B コース	3	27
新生児蘇生法 スキルアップコース	10	25

今年度より地域の医療機関からの受講者募集・申し込み方法は地域連携室を介するシステムに変更した。また、指導できるインストラクターが昨年に増員となり開催回数を増やすことができた。

今後も新生児蘇生法（NCPR）の目的である「すべての分娩に新生児蘇生法を習得した医療スタッフが新生児の担当者として立ち会うことができる体制」を目指して活動していく。

院外活動：地域活動・集患　【看護部主催　公開講座】

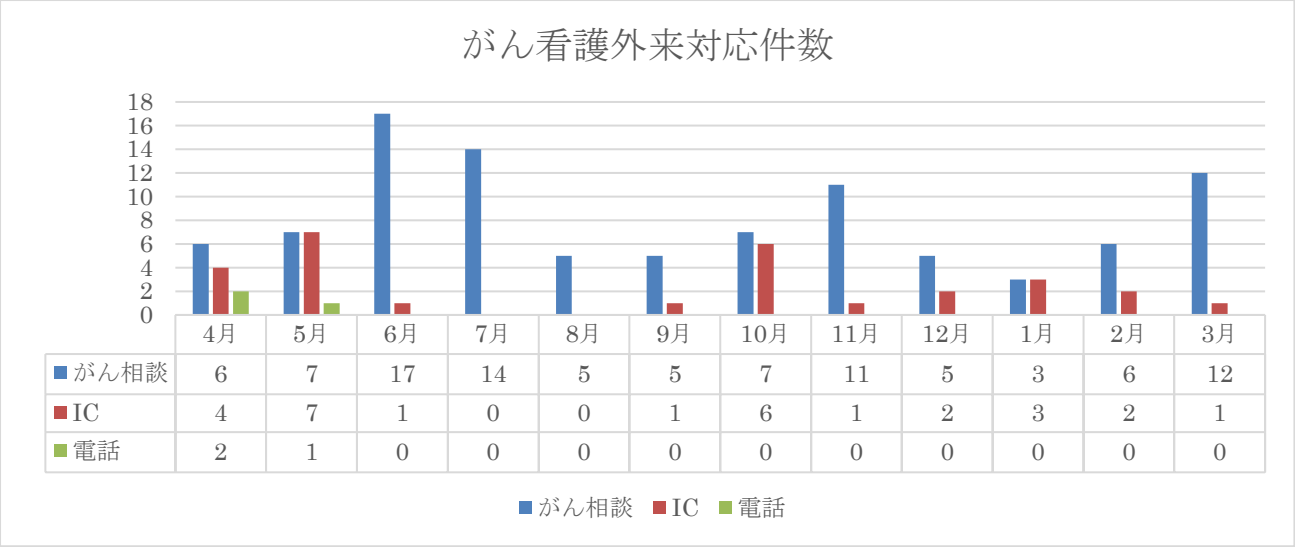
	開催日	講座名	講師名	場所	参加数
1	6 月 9 日(土)	いきいき元気に暮らそう 健康寿命の伸ばし方	高山　隆太 （作業療法士） 櫻井　克宣 （理学療法士）	美浜区保健福祉センター	34 名
2	9 月 8 日(土)	いきいき元気に暮らそう 栄養編・糖尿病編	高倉　由美子 （管理栄養士） 水谷　幸子 （糖尿病看護認定看護師）	美浜区保健福祉センター	19 名
3	12 月 8 日(土)	いきいき元気に暮らそう 健康寿命の伸ばし方	高山　隆太（作業療法士） 藤本　直樹（理学療法士）	高洲コミュニティーセンター	26 名
4	2019 年 2 月 23 日(土)	子どものホームケア講座	松尾　祐吾 （小児救急看護認定看護師）	高洲 子育てリラックス館	12 名 （10 組）
5	2019 年 2 月 24 日(日)	子どものホームケア講座	松尾　祐吾 （小児救急看護認定看護師）	高洲コミュニティーセンター	20 名 （16 組）

今年度も地域への情報公開・健康推進のため「活き活き元気に暮らそう」をテーマに公開講座を開催した。また、地域住民の利便性とテーマに沿った開催場所を考え、美浜区福祉センターと高洲コミュニティーセンターや高洲子育てリラックス館とした。講師は多職種協働として認定看護師だけでなく管理栄養士やリハビリテーション科の理学療法士・作業療法士に依頼した。アンケート結果から「健康に関する話しをさらに詳しく聞きたい。」「せっかくだから講座の時間はもう少し長くても良い」「医師から病気について聞きたい」との要望があり、地域の健康推進・集患の一助になればと考え、今後も継続していく。

今後の課題として、多職種と連携し、地域住民のニーズに合わせた内容や開催方法を検討していく必要がある。

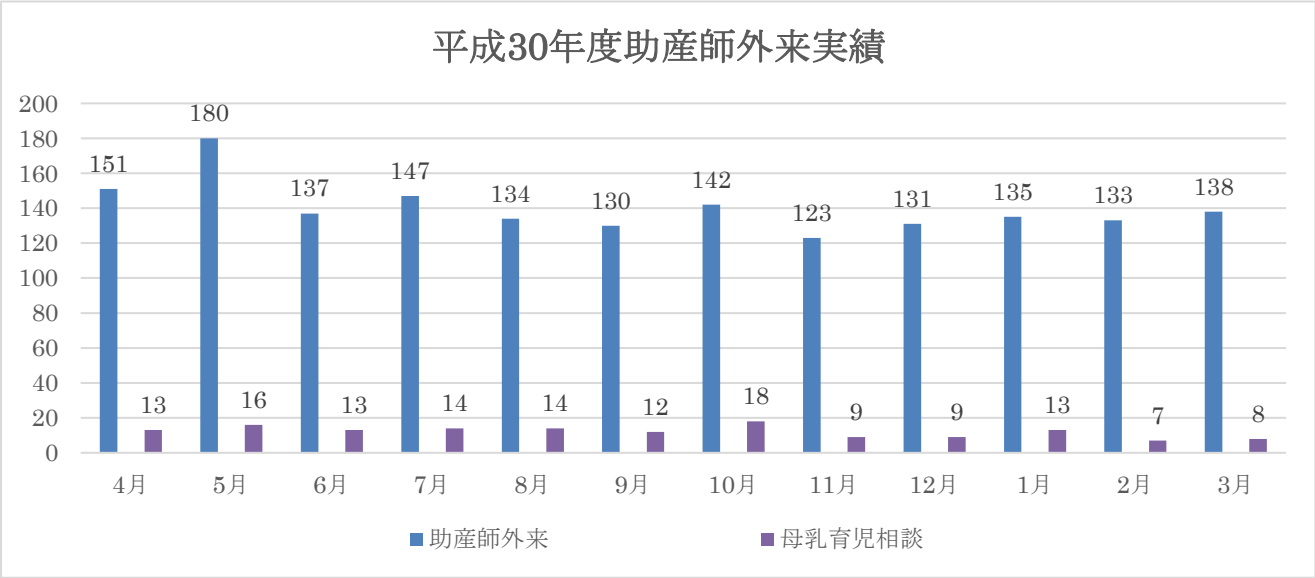
看護外来：【がん看護外来】・【助産師外来・母乳育児外来】2018 年度　実績

がん看護外来



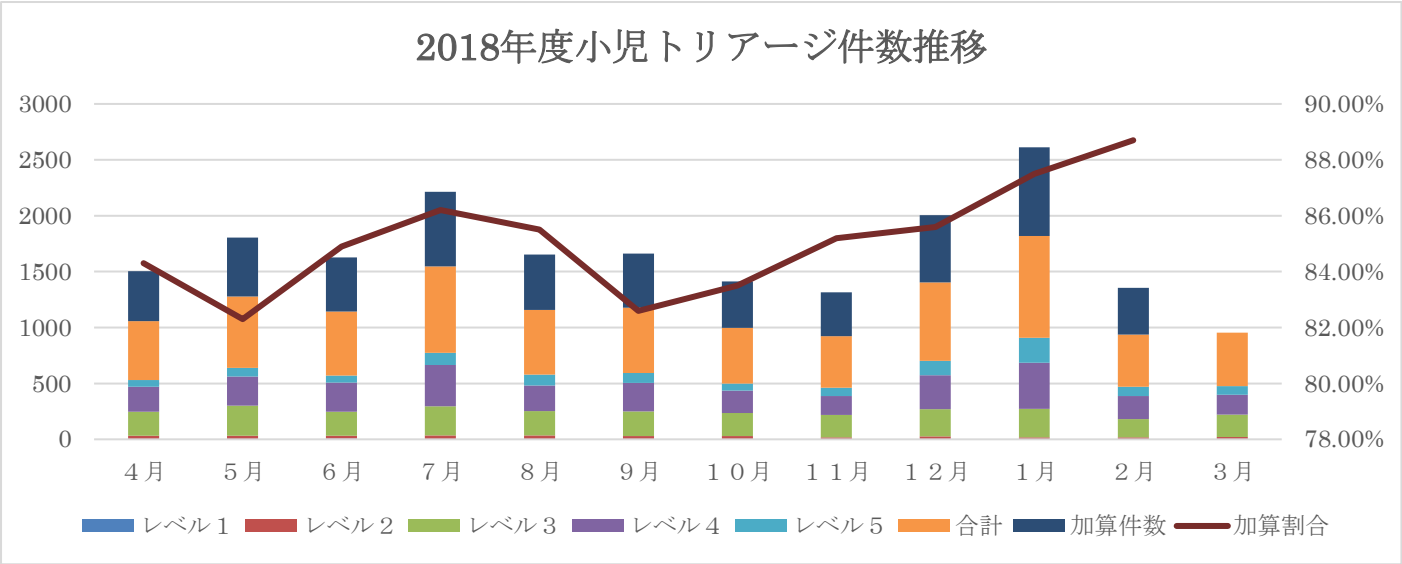
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
がん相談	6	7	17	14	5	5	7	11	5	3	6	12
IC	4	7	1	0	0	1	6	1	2	3	2	1
電話	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

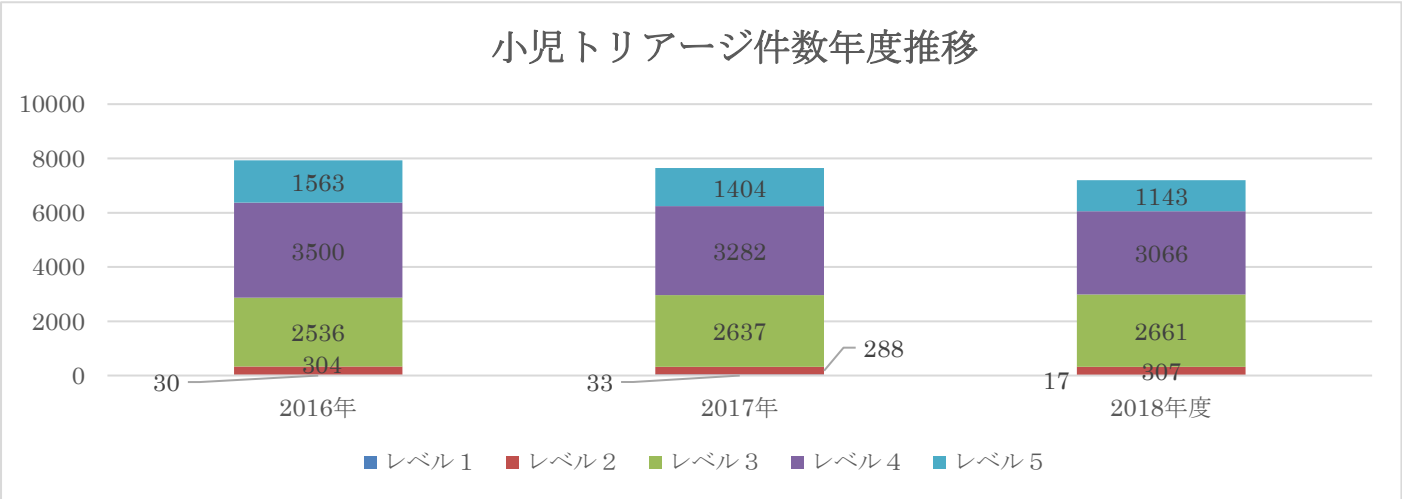
助産師外来



母乳育児相談外来は 3 年前に開設以来、全体数として増加した。全国的に分娩件数が減少しており、当院も結果的に助産師外来数は減少した。今後の課題は、産後ケアの充実・母乳推進を図るための助産師外来の仕組み作りをしていくことである。

小児救急対応の強化：【小児救急トリアージ件数】

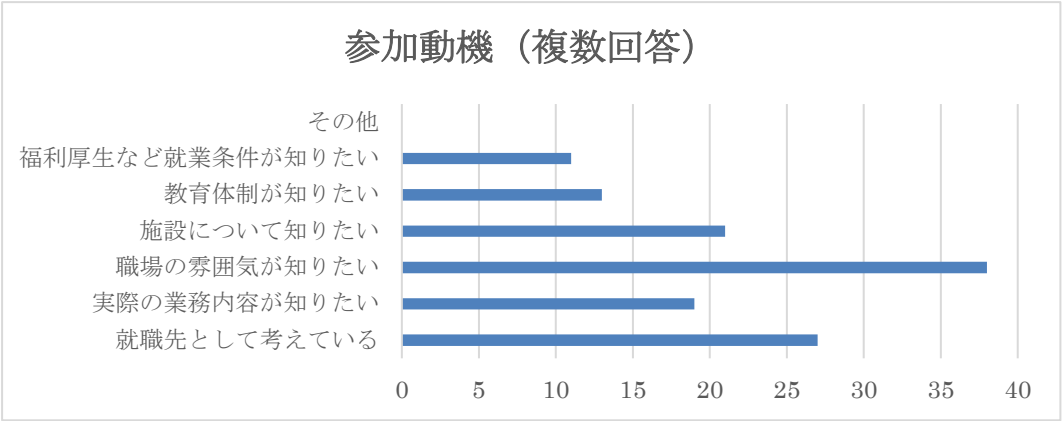




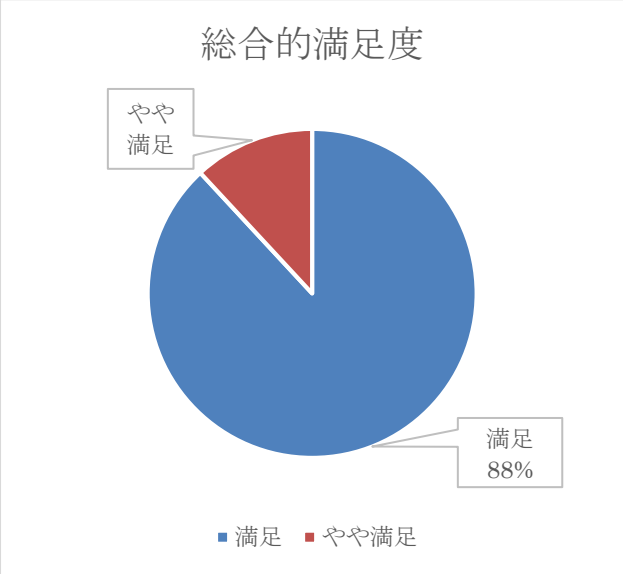
院内トリアージは開設から約 3 年半が経過し、トリアージ件数は若干の減少傾向にある。患者数の増減は、市井での感染症流行の影響を強く受け、2018 年度は RSV 流行のあった 7 月とインフルエンザ流行のあった 12 月下旬から 1 月にかけて突出して多くなっている。また、レベル別の患者割合は、どの年代でも安定して概ね同様の分布となっている。今後も、迅速で適切な緊急度分類、緊急度に応じた的確な介入をより充実させる必要がある。

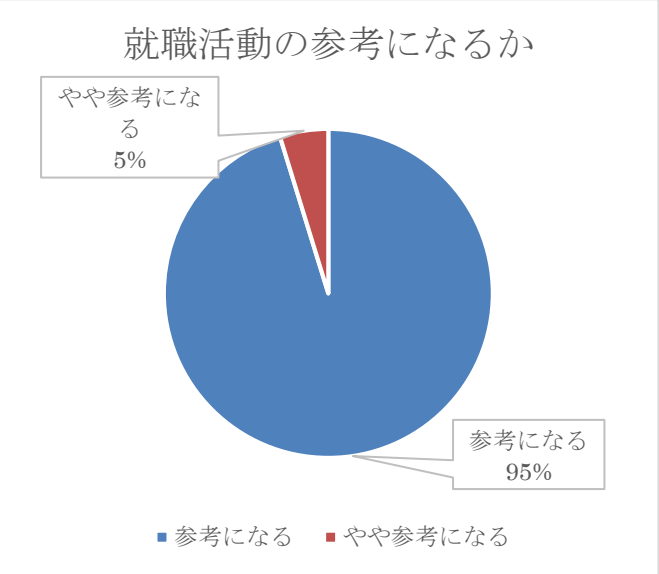
人材確保：【病院見学・インターシップ参加者】

2018 年夏期インターシップ開催：8 月 9・10 日開催　　合計：29 名
2019 年春期インターシップ開催：3 月 14・15 日開催　　合計：15 名



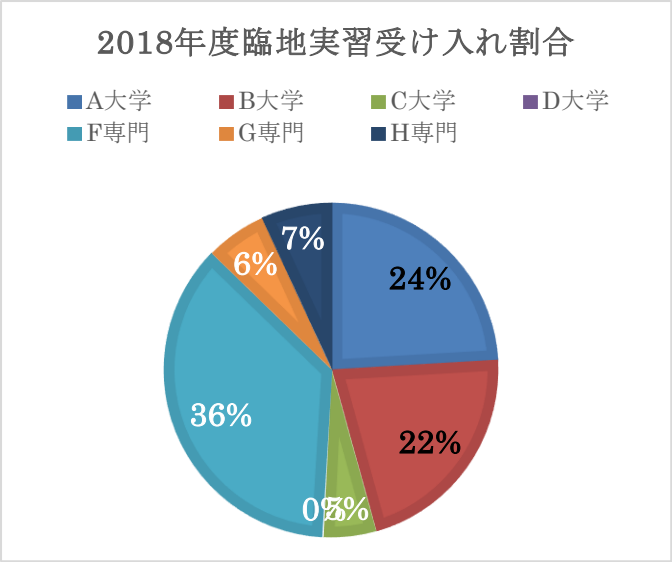
アンケート結果：

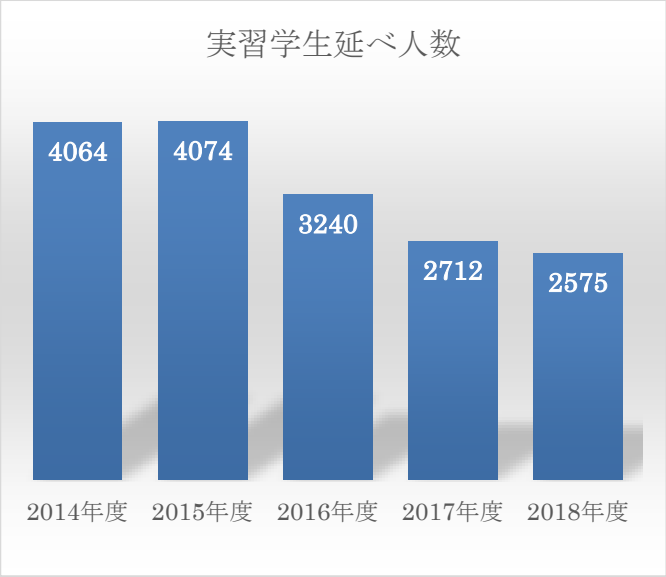




今後の課題は、当院のインターンシップを選んだ理由から当院ホームページの充実が必要と考える。また知り合いに勧められ当院のインターンシップに参加する人が半数近くいた。その知り合いは当院臨地実習経験者や教員であり、当院受験希望理由に多いことを踏まえると、よりよい学生指導・臨地実習場所になることが重要である。

臨地実習：　【7 施設の学生受け入れ　8 専門学科】





今後の課題は、近隣実習施設の状況より、産科、小児科の実習希望が増加しており、2 校を並行して実習を受け入れている期間が増えている。産科では、少子化の進行に伴い分娩件数が減少傾向にある一方で、地域周産期母子医療センターという特徴から緊急を伴うハイリスク分娩件数が増加しており、実習で担当できる対象者が減少している。受け入れる側としてはかなり厳しい状況ではあるが、各学校と協力調整しながら、学生に良質な臨地実習が提供出来るよう努力していきたい。